医事・文談　九百四十四　平岸　三八

《正岡子規（36）の続き》その232

子規と漱石（四十一たび続）

前号に、漱石が松山に赴任して愚陀仏庵主と号して、俳句稿を子規に送り、添削を乞うたと記した。

その後、更に調べたところ、この号は熊本の五高教授になってからも使っていることが分かった。

その初出は、明治28年9月23日松山市二番町八番戸上野方から発したものである。この家の孫娘で、当時12歳だったより江は、後年京都帝国大学福岡医科大学（現・九州大医学部）耳鼻咽喉科学教授となった久保猪之吉に嫁した。久保は子規の愛弟子・長塚　節の主治医であったことで知られる。歌人でもあった。より江も俳人。

愚陀仏庵の平面図は、当時12歳だったより江の記憶によると次のような間取りであったそうである。

漱石は明治28年4月、愛媛県尋常中学教員となり、松山に赴任し、最初は旅館城戸屋に投宿（『坊ちゃん』では山城屋の名で登場する）し、6月下旬上野方の離れ座敷を借り、（愚陀仏庵と名づけ）庵主と称した。

松山滞在はわずか一年間だったが、この間に『坊ちゃん』の材料にぶつかり、子規と一緒に暮すなど記念すべきいくつもの出来事があった。

子規は、結核という容易ならざる持病を抱えていて、周囲の人々の強い制止の声を振り切って日清戦争に従軍記者として遼東半島に渡り、戦地の不衛生な生活で、一挙に病状を悪化させた。そして県立神戸病院で九死に一生を得たような入院生活を送り、更に須磨保養院での静養の後、故郷松山に帰ってきたのは8月25日であった。

27日には漱石の下宿していた上野家に移ってきた。

上野では、子規の肺結核を知って同居を危ぶんだが、漱石は親友の子規のこと故、あまり気にかけなかった模様である。

始め漱石は、離れの階下に居住していたが、子規が来たので、階上に移ったのである。階上も階下も6畳と4畳半の二間であった。

松山市に復元された上野家の離れ。
（愚陀仏庵）の外観。
6畳と4畳半。階上に漱石、階下に子規が住し、50余日を過す。
（同上書より）

上野家階下平面図
後の久保より江（当時12歳）の記憶による。
図の左部分が子規、漱石同居の離れ。
（新潮日本文学アルバム『夏目漱石』より）

（表紙写真）

海峡の光

渡島医師会　水関　清

岬の根元にある駐車場から歩くこと半時間で、突端にある灯台を望む小高い丘の上に着く。はずむ息を整えながら、こんもりと繁る亜熱帯の森の梢がとぎれる空間を目指す。

眼下には白亜の灯台、海峡の向こうの陸地、その間の小島、そしてその間を泡立ちながら流れる黒潮の分流。頭上には真夏の太陽。

古来この潮流は、海峡の向こうの陸地を目指すものにとっては往来の難所であった。しかし、この潮の流れのもたらす上質で美味な多種類の魚介の存在に気付いた時、難所は豊穣の海に変貌した。刻々と変わる潮流が、この海峡に移ろう光を映す。